View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

現代ファンタジーの宗教性と歴史観の枠組み

──『指輪物語』,「ナルニア国物語」,「ハリー・ポッター」から ──

Religious Aspects and Historical Structures of Modern Fantasies
── *The Lord of the Rings*, *The Chronicles of Narnia* and *Harry Potter* ──

竹　田　伸　一

Shin-ichi TAKEDA

序

宗教や思想は当然のことながら，文学のジャンルであるファンタジーもしばしば歴史的な枠組みを持ちえる。しばしば，神学の世界で指摘されることだが，歴史観には大きく分けて，仏教や古代ギリシャ宗教に代表される円環的歴史観と，ユダヤ教やキリスト教に代表される直線的歴史観がある。英国においては，個人の宗教心に関わらず，ヨーロッパ・キリスト教文化の影響はやはり絶大であろう。今回，取り上げる『指輪物語』の作者のトールキンは熱心なカトリック教徒であり，「ナルニア国物語」の作者のC.S.ルイスはキリスト教弁証家としても有名である。彼らの描く「中つ国」と「ナルニア国」には直線的歴史観の神話的体系の枠組みが与えられている。そして，それは聖書の歴史観にしばしば対応している。「ハリー・ポッター」の作者のJ.K.ローリングは特にクリスチャンではないが，トールキンやC.S.ルイスの用いた題材が数多くその物語に取り入れられ，そのプロットにはある程度予想可能な直線的な歴史的枠組みが与えられている。本論ではキリスト教的な直線的歴史観と著者の個人史を一つの参考にして，それぞれの作品の歴史観についての考察を試みる。

1．著者略歴

J.R.R.トールキン（1892-1973）

ジョン・ロナルド・ロウエル・トールキンは1892年に南アフリカのブルーム・フォンテンに生まれた。父はイングランド出身の銀行員であったが，早く病死し，母とトールキンと弟の三人は帰国後バーミンガムで暮らした。母親は，カトリック司祭にトールキンの後見人になってもらうために，カトリックに改宗したので，結果として親族からの冷たい攻撃を受けることになった。その後，彼女は34歳の若さで，トールキン12歳のときに病死した。トールキンと弟は孤児となってしまった。青年期を迎えたトールキンは３歳年上の孤児，エディス・ブラットと恋愛し，オックスフォード大学卒業後に結婚した。時は1916年，第１次世界大戦中のことだった。エディスもトールキンのためにカトリックに改宗した。世界大戦は英国に大きな傷を残し，オックスフォード大学で生きて復学できた学生は15パーセントにも満たなかった。トールキンも従軍し，負傷している。1921年にリーズ大学のリーダー，後に教授になり，1925年からオックスフォード大学教授として20年間英語英文学を研究した。トールキンの最初のファンタジーは四人

の子どもに聞かせるために書いた『ホビットの冒険』（1937）である。1938年には「妖精物語について」の講演をしている。『指輪物語』は20年ほど書き続けられてようやく完成した。C.S.ルイスとは「インクリングス」という集まりで交流を持ち，トールキンはルイスがクリスチャンになる上で感化やきっかけを与えた。死後，息子クリストファが遺稿を編集して，トールキンの神話体系の前半にあたる『シルマリルの物語』（1977）などを出版した。

C.S.ルイス（1898-1963）

クライヴ・ステイプルズ・ルイスは1898年にアイルランドのベルファストに生まれた。父は弁護士，母は牧師の家出身で，愛情深い人物だった。アイルランドでは不順な天候が続くため，家で３才年上の兄ウォレンと幼少時から兄弟で物語を作って遊んで過ごした。ルイスが10歳のときに，母が癌を患い，祈っても病気が治らなかったこと，母が亡くなったこと，その後強制的な寄宿学校に入学して，中途退学したことなどは，ルイスのキリスト教に対する信仰を全く失わせ，彼は以後無神論者となった。1916年にオックスフォード大学入学後はギリシャ語などに熱中したが，翌年，第１次世界大戦に参戦して負傷した。オックスフォード大学モードリン学寮で30年間英文学特別研究員（fellow）となるが，1926年にトールキンと知り合い，トールキンやヒューゴー・ダイソンらから感化を受けた。1931年9月に彼らと激しい論争をしたが，しばらくしてルイスはキリスト教に復帰，回心する。その後はキリスト教弁証家，啓蒙的なキリスト教作家として活躍する。「愛とアレゴリー」（1936），「悪魔の手紙」（1942）など多数の著作がある。児童文学は「ナルニア国物語」のみ。晩年はケンブリッジ大学でルネッサンス英文学の教授となった。

J.K.ローリング（1965-）

ジョアン・キャスリーン・ローリングは1965年７月31日にイギリスのブリストル近郊のチェプストーに生まれた。読書好きの母の影響から，ローリングも大の読書好きになり，幼いころから物語を書いて妹に読み聞かせた。タッツヒル村に引っ越したとき，担任教師にいじめられ，この人物がスネイプ先生のモデルとなる。中等学校に入り，理想の英語教師と出会い，この頃ジェシカ・ミッドフォードの伝記を読み，心酔する。母親が多発性硬化症を発病し，家庭は居辛いものになる。転校生，ショーン・ハリスと友達になり，フォードアングリアでドライブする。ショーンはロンのモデルである。エクセター大学で言語学を専攻，卒業後はロンドンで事務職に就く。恋人との失恋，母の突然の死，父親の不倫，盗難の被害などの不幸が続いたため，心機一転して単身ポルトガルに渡り，英語学校の教員となる。ポルトガル人の自称ジャーナリストの男と同棲，結婚。出産後，夫の家庭内暴力のため，赤ん坊ジェシカを連れて帰国。離婚後，幼い娘を抱えて生活保護を受けながら，「ハリー・ポッター」を執筆した。1997年に出版されたシリーズ第１巻『ハリー・ポッターと賢者の石』はたちまちベストセラーとなり，時の人となり，現在に至る。

今回取り上げたファンタジー作家の共通点をあえてあげるならば，トールキンとルイスは同時代の人々で，親交があった。当初は親しい友人関係を築くが，いくつかの理由でトールキンの側から断絶してしまう。一つはルイスがキリスト教に回心したとき，カトリックではなく，英国国教会の信徒となったこと，「ナルニア国物語」がトールキンのアイデア

の模倣と考えたこと，子供向けのファンタジーをトールキンが評価しなかったこと，後年ルイスの妻となったジョイに対する嫌悪感などがあげられる。幼いころからカトリック教徒のトールキンにとって宗教はひたすらミサに参列して行うものであり，議論や弁証の対象ではない。これに対して，ルイスは一度信仰を失って無神論者になった時期があるゆえに，他者のためだけではなく，自分自身にとってもキリスト教を弁証する必要があった。ルイスはイギリス国民にとって，最も良心的なキリスト教弁証家，キリスト教作家となった。

50年も世代の違うローリングはトールキンやルイスの作品を読んで育った。本人のキリスト教との関連は特に見られないが，題材としてトールキンやルイスの影響は多く見受けられる。3人に共通することの一つは若くして母親を亡くすことがあげられる。母への郷愁は時として，人を思い出や夢の世界，ファンタジーの世界に運ぶのかもしれない。

2．聖書の直線的歴史観

直線的歴史観の枠組みにおいては歴史の初めと終わりが明示されている。聖書では創造に始まり，終末に終わる直線的な枠組みの中に，堕罪に始まる人間の罪の歴史とその贖罪のためのキリストの十字架と復活に至る救いの歴史が紡がれる。ここでは簡単に聖書を題材とする絵画や彫刻を例示して聖書の歴史的枠組みを概観しつつ，それぞれのファンタジーの関連も考えたい。

創造

歴史の初めは神による天地創造に始まる。キリスト教信仰では天地の創造者である父なる神が万物の根源であり，歴史の出発点となっている。創世記では神は言葉で世界を創造するのだが，ヨハネによる福音書では根源的な「言」として，キリストが創造に参与している。

トールキンは『シルマリルの物語』において，創造神エル（イルーヴァタール）がアイヌアたち（天使に相当するような存在）を創造し，アイヌアたちの歌によって世界（アルダ）が創造される様を描いている。アイヌアで有力な存在がヴァラールと呼ばれる。

ルイスは，『魔術師のおい』において，偉大なライオンの姿をしたアスランの奏でる歌によって，世界が創造される様を描いている。「ナルニア国物語」におけるアスランは，イエス・キリストのアレゴリーなので，父なる神に相当する偉大な大帝についても『ライオンと魔女』などで語られる。

ミケランジェロ，「太陽と月の創造」（1508-1512）

堕罪

聖書では人間の罪と滅びの原因を，神が禁じた善悪の知識の実を人間が取って食べた創世記の3章の記事に遡る。そこでは，蛇に象徴される超自然的な存在，後にサタンや悪魔と称せられる者が登場し，人間を誘惑し，神に背かせる。その結果，人間は限りある命を生きる存在，やがて死すべき者となり，神との関係が絶たれる。明示されているわけではないが，サタンの起源はイザヤ書に記される，

明けの明星，ルシファーと称された反逆天使と一般的に解釈される。

トールキンは『シルマリルの物語』において，エルに反逆するアイヌア，サタン的なモルゴスを設定し，その継承者として『指輪物語』のサウロンを登場させている。

ルイスの「ナルニア物語」における悪なる存在は魔女であり，『魔術師のおい』では滅びの国チャーンの魔女ジェイディスが，少年ディゴリーの罪によって，ナルニアの世界に入り込む様が描かれている。

ミケランジェロ，「人間の堕罪とエデンの園からの追放」（1508-1512）

聖書では人間の堕罪の後に神は蛇と人間の未来に関して次のような言葉を語られる。

「お前と女，お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き，お前は彼のかかとを砕く。」（創世記３:15）

この言葉は古来から原始福音と呼ばれ，サタンとキリストの未来の結末と解釈されてきた。すなわち，キリストはかかとを砕かれるような大きな傷を負う。それはすなわち十字架である。しかし，復活して，最終的にサタンの頭を砕いて滅ぼす，と解釈されている。

「ナルニア国物語」の『魔術師のおい』でアスランは悪の解決のために人間の役割と自らの贖罪死について，次のように預言している。

「災いはその悪から起こるだろうが，まだそれは遠いところにある。そしてわたしは，もっと悪いことが，わたし自身に降りかかるようにはからおう... そして，アダムの血筋の者がこの災いをもたらしたのだから，それを退治するにも，アダムの末の者たちに手伝ってもらおう」。（224ページ）

J.K.ローリングの「ハリー・ポッター」には，トールキンやルイスのような原初の歴史の発端を描くような神話体系は存在しないが，第５巻に至って，原始福音に相当するような主人公と敵に関する予言が提示されている。それは，主人公とその敵が戦い，「最後には二人のうちどちらかが，もう一人を殺さなければならない」（５巻下，657ページ）ことを示すとともに，闇の帝王であるヴォルデモートがなぜハリーの命を狙うかという理由を明らかにしている。

「闇の帝王を打ち破る力を持った者が近づいている…七つ目の月が死ぬとき，帝王に三度抗った者たちに生まれるそして，闇の帝王は，その者を自分に比肩する者として記すであろう。しかし彼は，闇の帝王の知らぬ力を持つであろう。一方が他方の手にかかって死なねばならぬ。なんとなれば，一方が生きるかぎり，他方は生きられぬ。」（５巻下，652ページ）

ノアの箱舟

創世記６章では堕罪した人間の悪行があまりにひどく，人間の寿命が120歳に限定されたこと，天使との雑婚も起こって創造の体系が崩れたことなどから，神が洪水で世界を滅ぼすことを決断される。但し，神に対する信仰を持ち，箱舟に入る者だけには救いの道が確保されるのであった。このような洪水神話は聖書だけではなく，ギルガメシュ叙事詩に表されるように，古代バビロン神話，古代ギ

リシャ神話，口伝の古代アフリカ神話にも数多く残されている。

トールキンはその神話体系で，第２紀に栄えたヌメノール王国が，入ることを禁じられたヴァラールの不死の国を侵略しようとしたときに海中に沈んで滅びる結末を描いている。トールキンの理想とする精神風土は田舎の田園風景であるが，それはしばしば，大海に沈んだとされるアトランティスになぞって「アトランティス・コンプレックス」と呼ばれる。

ミケランジェロ，「洪水」（1508-1512）

バベルの塔

創世記11章では洪水を逃れたノアの子孫は増え続けるが，神の命令を無視して，一つ所にとどまり，反逆ののろしとして，天に攻め入ろうとする高い塔を建築する。しかし，言葉が乱されることによってその試みは中断する。この塔は「混乱」を意味する言葉になぞって「バベルの塔」と呼ばれる。

トールキンは『指輪物語』の第二部「二つの塔」においては，悪の帝王，サウロンのモルドールの塔とともに，裏切った魔法使いサルマンが治めるアイゼンガルドの塔が登場する。アイゼンガルドは木を切り倒し，火を燃やして鉄を生成する，自然破壊の象徴である。それはトールキンの最も愛した田園風景を破壊する，工業化による公害も象徴している。結末として，アイゼンガルドは木の巨人，エントたちによって，水で滅ぼされることは興味深い。

ピーター・ブリューゲル，「小バベルの塔」（1563）

モーセ

旧約聖書に登場する最も偉大な指導者はモーセだと言っても過言ではない。彼は奴隷の家に生まれたにもかかわらず，運命の悪戯から，エジプト王家で育てられ，当時の世界最高の教育，帝王学を学んだ。青年期に自らの素性を知り，殺人を犯して逃亡した後，晩年に再びイスラエルをエジプトから解放する指導者として登場する。エジプト脱出に際して，モーセは大きな杖を持ち，10の偉大な奇跡を行った。また，歴史の編集と法律の整備を行った。その業績は聖書に収められ，創世記から申命記に至る５つの書物にまとめられ，一般的にはモーセ五書と呼ばれる。特にユダヤ教ではこの五書を重んじて，「モーセの律法」，または単に「律法」（トーラー）と呼ぶ。

トールキンの『ホビットの冒険』，『指輪物語』に登場する最も偉大な魔法使いはガンダルフである。彼は主人公が成長するために時には姿を隠すこともあるが，ビルボとフロドや旅の仲間を導く，良き指導者，助言者である。指輪物語でガンダルフは，一旦はバルログとの戦いで「灰色のガンダルフ」として死亡するが，やがて「白のガンダルフ」として復活する。死と再生，十字架と復活はキリスト教の最大のテーマであるが，熱心なカトリック教徒であるトールキンは，無意識かもしれないが，結果としてキリスト教的なものを多

く自らの作品に盛り込んでいる。

J.K.ローリングは熱心な『指輪物語』の読者であったために，多くの題材や登場人物のモデルも『指輪物語』から借りている。その一つはガンダルフをモデルにするダンブルドアの存在だろう。「ハリー・ポッター」において，最も偉大な魔法使いは，魔法学校ホグワーツの校長，アルバス・ダンブルドアである。彼は悪の帝王，ヴォルデモートが唯一恐れる魔法使いであり，ハリーにとっては良き指導者，助言者である。物語構成上，ダンブルドアは毎回結末部分でハリーと対話し，著者の倫理的，道徳的な価値を提示している。

ミケランジェロ，「モーセ像」（1513-1516）

ダビデ

ダビデはイスラエルでは最も理想的な王の代名詞と考えられる人物である。現在のイスラエル国旗の中央に記されるものは「ダビデの星」で，「ダビデの星」，「ダビデの子」はメシアを意味する。少年時代にペリシテ人の巨人ゴリアテを倒した逸話は有名で，青年時代は戦士として比類ない名声を得る。ダビデ・ソロモンの時代にイスラエルは全盛期を迎えるが，その後は分裂して衰退する。ダビデの治世の晩年は不倫，息子によるクーデター事件など波乱に富む。聖書の「詩編」に多くの詩が残されているように，ダビデ自身有数の詩歌作家でもあった。

『指輪物語』に登場するアラゴルンは典型的なヒーローであるが，主人公ではない。彼は勇猛な戦士として主人公のホビット，フロドを助けて戦い，ついには失われていた王位継承者として帰還し，王位につく。また，アラゴルンとエルフの姫アルウェンとのロマンスや結婚も描かれている。これは『指輪物語』が子供向けではなく，大人向けのファンタジーであることを示すと同時に，トールキンと妻エディスのロマンスの経験が盛り込まれていることも表している。

ミケランジェロ，「ダビデ像」（1501-1504），
イスラエル国旗

クリスマス

イエス・キリストはユダヤのベツレヘム（ダビデ王の出身地）の馬小屋で生まれた。「今日ダビデの町で，あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは，布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである」（ルカ２：11－12）との天使のお告げを聞いて，イエスを拝みに訪れたのは当時の最も貧しい被差別民であった羊飼いであった。

「ハリー・ポッター」ではハリーの両親は悪の帝王，ヴォルデモートに殺されるが，赤ん坊のハリーはヴォルデモートの殺人の呪いを跳ね返し，敵に絶大なダメージを与えた。

それ故，ハリーは赤ん坊にして，魔法界を救ったキリストのような救世主として受けとめられている。

レンブラント，「羊飼いの礼拝」（1646）

洗礼

イエスは洗礼者ヨハネの元に訪れ，ヨルダン川で洗礼を受ける。ヨハネは洗礼を授けてもらうのは逆に自分の方であると主張するが，イエスはそれを押し止めて受洗した。その直後に，聖霊が鳩のような姿でイエスの上に降り，天から「これはわたしの愛する子，わたしの心に適う者」と言う神の声が聞こえた。ここに父，子，聖霊の三位一体の神がすべて現れている。

ハリー・ポッターの名付け親は亡き父の親友，シリウス・ブラックである。キリスト教国における名付け親の役割は，単なる命名者だけではなく，まず幼児洗礼に際して親の代理者として，赤ん坊を抱いて洗礼式に臨む。名付け親は精神的にも実質的にも生涯，後継人の役割を演じる。第３巻『アズカバンの囚人』で初めてブラックは登場するのだが，ハリーがブラックと自らを救うために用いる魔法は守護霊の呪文であった。ハリーの守護霊はアニメーガスの父が変身したときと同じ牡鹿の形をしていた。

ヴェロッキオとダヴィンチ，「キリストの洗礼」（1472-1475）

変容

イエスは特に12弟子を選び，その３年間の公生涯において彼らと長く旅し，寝食を共にして彼らを訓練された。12弟子はある意味でトールキンの『指輪物語』における旅の仲間のような存在だったかもしれない。イエスは特に，ペトロ，ヤコブ，ヨハネの３人を重視し，特別に訓練をされた。キリストの天来の姿を垣間見るのはこの３人だけなのだが，彼らは高い山で光り輝くイエスが旧約の伝説的な人物，モーセとエリヤと共に語り合う姿を目にする。旧約聖書はその内容の区分から，ユダヤ教では「律法と預言者」としばしば呼ばれるように，モーセとエリヤは律法と預言者を代表して旧約を表し，キリストは新約を代表する。

キリスト，モーセ，エリヤというように，３人組の登用は神学でも文学でもしばしば用いられる。『指輪物語』ではフロド，ガンダルフ，アラゴルンにあたり，「ハリー・ポッター」では，ハリー，ロン，ハーマイオニーにあたるかもしれない。

ラファエロ，「キリストの変容」（1518-20）

最後の晩餐

イエスは十字架にかけられる前日の最後の晩餐で，弟子の一人が自分を裏切ることを予告される。「はっきり言っておくが，あなたがたのうちの一人で，わたしと一緒に食事をしている者が，わたしを裏切ろうとしている」（マルコ14：18）。ダヴィンチが描く「最後の晩餐」はイエスの言葉に動揺を隠せない弟子たちの姿を描いている。この後イスカリオテのユダは銀貨30枚でイエスを裏切り，敵にイエスを引き渡すのであった。ユダ自身の結末は悔恨の中で首吊りの自殺に終わるものであった。裏切りは人間の罪がもっとも明らかになる恐ろしい場面であるが，神学でも文学でも大きな題材と言える。

ルイスの「ナルニア国物語」の『ライオンと魔女で』では，４人の兄弟の一人エドマンドがみんなを裏切って，白い魔女の側につく。しかし，あまりにひどい魔女の仕打ちにそこを逃げ出して，アスランと兄弟たちに赦しを請い，戻ってくるのだが，アスランはエドマンドの身代わりに，自らの命を差し出すことになる。このように，裏切り者の回心とそのために払われる犠牲の贖罪，死と復活などが，「ナルニア国物語」の大きなテーマとなっている。

『指輪物語』でも裏切りは重要な要素である。旅の仲間の一人ボロミアはその使命にもかかわらず，フロドから指輪を奪おうと試みる。その最後は自らの行いを悔いて，命を賭してメリーとピピンを守る。生粋の裏切り者としては魔法使いのサルマンとそのスパイであるワームタング（蛇の舌）が登場する。サルマンはヴァラールから派遣された最高位の魔法使いにもかかわらず，魔王サウロンの力の前に保身を図るだけでなく，自ら王になろうとする野望を抱き，ローハンのセオデン王の元にワームタングを送り，魔術で乱心させるのであった。彼らの最後はアイゼンガルドの崩壊後，小悪党としてホビット庄を荒廃させるものだが，仲間割れのうちに滅んでいく。

ハリー・ポッターでも裏切り者は重要な存在である。ハリーの両親を裏切り，ヴォルデモートの手にその命を渡したのはシリウス・ブラックだと当初考えられていたが，第３巻『アズカバンの囚人』でそれは濡れ衣で，本当の裏切り者はネズミにずっと化けていたピーター・ペティグリューであることが明らかになる。この人物のあだ名がワームテール（ネズミの尻尾）である。J.K.ローリングが『指輪物語』の読者であったゆえに，ワームテールとワームタングのネーミングからもわかるように，裏切り者の題材の導入をトールキンから拝借している。

レオナルド・ダヴィンチ，「最後の晩餐」（1495-1498）

十字架の道行

真夜中の異例な裁判でイエスの処刑は確定され，様々な暴行の末にイエスは自らの十字架を担いでゴルゴダを目指してエルサレム市中を歩まれた。途中，イエスは動けなくなるので，キレネ人シモンがその助けをする。イエスがたどった十字架への道行きはヴィアドロローサ（悲しみの道）と呼ばれ，現在では13のステーションが置かれた巡礼ルートとなっている。

「ナルニア国物語」の『ライオンと魔女』でアスランがエドマンドの身代わりになる石舞台へと続く道を登るのは，まさにイエスの十字架の道行きのアレゴリーである。イスラエルの女性たちが泣きながらイエスの後を追ったように，スーザンとルーシーがアスランの後を歩み，遠くからアスランの最後を見届けるのであった。

「わたしの後に従いたい者は，自分を捨て，自分の十字架を背負って，わたしに従いなさい」（マルコ８：34）とイエスが語ったように十字架は比喩的な意味で人生の重荷や使命を意味することもある。『指輪物語』での一つの指輪を捨てる旅を行くフロドの役割は，まさに十字架の道行に相当するものであろう。サウロンの魔の手から中つ国を守るための唯一の手段として，大きな重荷がフロドの肩にのしかかるのであり，旅の途中でフロドは癒えることのない傷を負うのであった。

ラファエロ，「カルヴァリの丘」（1515）

十字架

アスランは石舞台で魔女たちに取り囲まれ，無抵抗で辱めと暴行を受け，ナイフで刺されて死んでしまう。これは裏切り者の罪人，エドマンドの身代わりの贖罪死であり，同時にイエス・キリストの十字架のアレゴリーとなっている。

ハリー・ポッターでは母親の愛とその犠牲の死が，ハリーをヴォルデモートの殺人の呪いから守り，ひいては魔法界全体を救うこととなっている。

> 「君の母上は，君を守るために死んだ。ヴォルデモートに理解できないことがあるとすれば，それは愛じゃ。君の母上の愛情が，その愛の印を君に残していくほど強いものだったことに，彼は気づかなかった。傷跡のことではない。目に見える印ではない…それほどまでに深く愛を注いだということが，たとえ愛した人がなくなっても，永久に愛されたものを守る力になるのじゃ...」（第1巻，438，440ページ）

スルバラン，「磔刑」（1650）

復活

アスランの死んだ翌日，スーザンとルーシーは石舞台を訪れるが，彼女たちは石舞台の岩が折れ，復活したアスランに出合うのであった。ナルニアには世界が造られる以前の更に

古い掟があって，罪のないものが裏切り者の罪びとの身代わりに自ら進んで死ぬ場合は，死は振り出しに戻り，身代わりになった者は復活するのであった。

『指輪物語』における復活はガンダルフに関するものが考えられる。ガンダルフはバルゴクとの戦いにおいて，一旦は「灰色のガンダルフ」として死ぬが，「白のガンダルフ」として復活して，サウロンの軍と再び戦うことになる。

「ハリー・ポッター」における復活は今後のこととしてはシリウス・ブラックの可能性は残されるが，シリーズの完結していない今のところは善玉の方にはない。悪玉の例としては，第４巻『炎のゴブレット』の魔王ヴォルデモートの復活があげられる。この結果，ヴォルデモートはさらに強大な敵として，ハリーの前に立ちはだかることになる。

ルーベンス，「キリストの復活」（1616）

サタン・悪魔

「ああ，お前は天から落ちた明けの明星，曙の子よ。お前は地に投げ落とされた。もろもろの国を倒した者よ」（イザヤ14：12）

聖書ではサタンはもともと有力な天使で，「明けの明星」ルシファーと呼ばれた者と考えられる。神に反逆して天を追い払われた存在で，エデンの園で人間を誘惑した存在と考えられる。知恵文学のヨブ記などではヨブを試みて災いを与える存在として登場する。新約聖書の福音書ではイエスを荒野で誘惑する存在として登場している。

トールキンの神話体系においては，唯一神エル（イルーヴァタール）に創造されたアイヌアたち（天使に相当する存在）の一人メルコール（力にて立つ者）が反逆してエルに従うアイヌアたちと戦い，創造の秩序を乱すのである。このメルコールがモルゴス（世界の暗黒の敵）と呼ばれ，サタンがそのモデルである。後にモルゴスの魔王的な役割はサウロンに引き継がれていく。

「ナルニア国物語」においては，悪役は魔女である。『魔術師のおい』において，ディゴリーの罪によって魔女ジェイディスが世界に入り込んだことが語られ，『ライオンと魔女』では白い魔女が一旦はアスランを死に追いやる。

ハリー・ポッターにおいてはヴォルデモートが闇の帝王として登場する。ヴォルデモートはもともと謎の少年，トム・リドルであったが，魔女であった母親を捨てた父を恨み，父と祖父母を殺した後は危険な変身を繰り返し，多くの殺戮を繰り返す闇の帝王として現れた。

ウィリアム・ブレイク，「栄光の日のサタン」（1805）
ハンス・メリング，「地獄」（1485）

最後の審判

聖書では歴史の終末においてキリストが再び登場する（再臨）。最初の到来は十字架で

贖罪の死を遂げ，復活する救い主，救済者としての到来であったが，第二の到来は世界を裁く裁き主，審判者としての到来である。最後の審判においては，神に従う者とそうでない者が分けられるだけではなく，神への反逆者サタンとそれに従う者たちが滅ぼされ，悪と罪，死の問題に終止符が打たれる。

「ナルニア国物語」の最終巻『さいごの戦い』では，ナルニアがアスランに従う者とそうでない者との最終戦争に巻き込まれる。人間の欲望は悪魔のような怪物タシをナルニアに呼び出す。そして，古いナルニアが崩れ去る中，アスランに従う者たちはキリストが降誕した馬屋に象徴される扉を通じて，（死を経て），新しいナルニアに導かれる。

『指輪物語』では最終戦争としての指輪戦争の過程で，フロドが滅びの山で一つの指輪を処分する。このとき指輪と共に命を失うのはフロドではなく，指輪の魔力に取り憑かれたゴラムであることは興味深い。最も卑しい存在と思えたゴラムが最終的には指輪遺棄に重要な役割を担うのである。この指輪と共に魔王サウロンは滅び去り，「中つ国」の第3紀は終わり，人間の時代が始まる一方で，フロドたちは「あの世」を象徴するような西方へと船出するのである。

「ハリー・ポッター」は未だ完結されておらず，予定としては今後2巻出版されることになっている。しかし，結末については大体の予想がつけられる。魔法界の魔王ヴォルデモートと救世主ハリー・ポッターの対決は，魔法界全体を巻き込んだ最後の戦いを引き起こし，ハリーがヴォルデモートを最終的には滅ぼすことで完結することが予想される。おそらくその際には誰かの命が犠牲とされることであろう。そこで，作者がずっと展開してきた善悪の問題に対してもある意味での答えが与えられるのであろう。

ミケランジェロ，「最後の審判」（1534-1541）

まとめ

キリスト教の直線的歴史観は，創造に始まり，新天新地という新しい創造に完結する。その流れは，創造，堕罪，贖罪のための十字架，復活，宣教，最後の審判，新天新地に至る。この歴史の中で，神の代理者としてのキリストと神への反逆者の代表としてのサタンが争い，人間の救済への道と滅びへの道を展開し，最終的にはキリストがサタンに勝利することによって歴史が完結されるのでる。

ルイスはこの聖書の歴史観を土台に「ナルニア国物語」を描いている。アスランによる世界の創造，ディゴリーの慢心によって魔女に象徴される悪が世界に入ってしまったこと，石舞台でのアスランの身代わりの死と復活，アスランに対するナルニアに生きるものたちの信仰，最後の戦い，死を経た先の新しいナルニアに至っている。

トールキンは神の似姿としての人間の「準創造」を説き，「中つ国」を創造した。その歴史的な時代は，第1期の神々の時代，第2期の指輪喪失の時代，第3期の「ホビットの冒険」や『指輪物語』の時代，第4期の人間の時代に分けられ，その流れは，エルによる創造，メルコールによる反逆，サウロンによる一つの指輪の鍛造，フロドたちの指輪を捨てる旅，指輪戦争，西方への船出に至る。

ルイスもトールキンも宗派は違うが，熱心

なキリスト教徒だったので，神とは誰か，世界とは何か，人間の救いとは何か，歴史の結末はどうなるのか，というような神論，創造論，救済論，終末論などを自らのファンタジーで扱うこととなっている。他方，特に宗教を持たないローリングにとっては，神とか世界の創造や歴史の結末は関心事ではなく，人間とは何かという人間論，善と悪はどうなるのかという善悪の問題が扱われている。シリーズ自体が完結していない現段階では即断はできないが，主人公と敵の対決が結末を迎えるという直線的歴史観に通じるプロットが期待される。

文献表

原作

J.R.R.Tolkien, *The Hobbit*, 1937

J.R.R.Tolkien, *The Lord of The Rings The Fellowship of the Ring*, 1954

J.R.R.Tolkien, *The Lord of The Rings The Two Towers*, 1954

J.R.R.Tolkien, *The Lord of The Rings The Return of the King*, 1955

J.R.R.Tolkien, *The Silmarillion*, 1977

J.R.R.トールキン，『ホビットの冒険』，岩波書店，1965

J.R.R.トールキン，『指輪物語 旅の仲間』，評論社，1972

J.R.R.トールキン，『指輪物語 二つの塔』，評論社，1972

J.R.R.トールキン，『指輪物語 王の帰還』，評論社，1973

J.R.R.トールキン，『指輪物語 追補編』，評論社，1992

J.R.R.トールキン，『シルマリルの物語』，評論社，2003

J.R.R.トールキン，『妖精物語の国へ』，筑摩書房，2003

C.S. Lewis, *The Chronicles of Narnia The Lion, the Witch and the Wardrobe*, 1950

C.S. Lewis, *The Chronicles of Narnia Prince Caspian*, 1951

C.S. Lewis, *The Chronicles of Narnia The Voyage of the Dawn Treasure*, 1952

C.S. Lewis, *The Chronicles of Narnia The Silver Chair*, 1953

C.S. Lewis, *The Chronicles of Narnia The Horse and His Boy*, 1954

C.S. Lewis, *The Chronicles of Narnia The Magician's Nephew*, 1955

C.S. Lewis, *The Chronicles of Narnia The Last Battle*, 1956

C.S.ルイス，『ライオンと魔女』，岩波書店，2000

C.S.ルイス，『カスピアン王子のつのぶえ』，岩波書店，1985

C.S.ルイス，『朝びらき丸東の海へ馬と少年』，岩波書店，1966

C.S.ルイス，『銀のいす』，岩波書店，1966

C.S.ルイス，『馬と少年』，岩波書店，1966

C.S.ルイス，『魔術師のおい』，岩波書店，1966

C.S.ルイス，『さいごの戦い』，岩波書店，1966

C.S.ルイス，『喜びのおとずれ：C・S・ルイス自叙伝』，富山房，1994

J.K.Rowling, *Harry Potter and the Philosopher's Stone*, 1997

J.K.Rowling, *Harry Potter and the Chamber of Secrets*, 1998

J.K.Rowling, *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*, 1999

J.K.Rowling, *Harry Potter and the Goblet of Fire*, 2001

J.K.Rowling, *Harry Potter and the Order of*

the Phoenix, 2003
J.K.ローリング，『ハリー・ポッターと賢者の石』，静山社，1999
J.K.ローリング，『ハリー・ポッターと秘密の部屋』，静山社，2000
J.K.ローリング，『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』，静山社，2001
J.K.ローリング，『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』，静山社，2002
J.K.ローリング，『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』，静山社，2004
J.K.ローリング，『クィディッチ今昔』，静山社，2001
J.K.ローリング，『幻の動物とその生息地』，静山社，2001
J.K.ローリング，リンゼイ・フレーザー，『ハリー・ポッター裏話』，静山社，2001

著書

ウォルター・フーパー，『C.S.ルイス文学案内事典』，彩流社，1998
ジュリア・エクルズヘア，『小説「ハリー・ポッター」案内』，而立書房，2002
ショーン・スミス，『J.K.ローリングその魔法と真実 ： ハリー・ポッター誕生の光と影』，メディアファクトリー，2001
デビッド・デイ，『トールキン指輪物語事典』，原書房，1994
バーバラ・ストレイチー，『指輪物語フロドの旅 ：「旅の仲間」のたどった道』，評論社，2003
ハンフリー・カーペンター，『J.R.R.トールキン－或る伝記』，評論社，1982
マーク・エディ・スミス，『指輪物語の真実』，角川書店，2003
ライル・W・ドーセット，『C.S.ルイスとともに ： ジョイ・デイヴィッドマン・ルイスの生涯』，新教出版社，1994
リン・カーター，ロード・オブ・ザ・リング ：『指輪物語完全読本』，角川書店，2002
井辻朱美，『ファンタジーの魔法空間』，岩波書店，2002
荒俣宏，『イギリス魔界紀行 ： ハリー・ポッターの故郷へ』，日本放送出版協会，2003
山形和美，竹野一雄編，『C.S.ルイス 「ナルニア国年代記」 読本』，国研出版，1995
鷹井潤，古田島綾子，『ハリー・ポッター ： 物語への旅』，竹書房，2002
竹田伸一，『ハリー・ポッターの世界 ： 大冒険への忍びの地図』，教文館，2003
竹野一雄，『C.S.ルイスの世界 ： 永遠の知恵と美』，彩流社，1999
冬木亮子，『ハリー・ポッターで読む伝説のヨーロッパ魔術』，冬青社，2001
本多英明，『トールキンとC.S.ルイス』，笠間書院，1985
本多峰子，『天国と真理 ： C.S.ルイスの見た実在の世界』，新教出版社，1995
柳生直行，『お伽の国の神学 ： C.S.ルイスの人と作品』，新教出版社，1984
柳生望，『ナルニアの国は遠くない ： C.S.ルイスのファンタジーの世界』，新教出版社，1981

論文

本多峰子，　C.S.ルイスの「ナルニア国年代記」における悪と痛みの問題，二松学舎大学人文論叢 46，1991.3，p202～190
本多英明，　終わりなき創造 ── J.R.R.トールキン試論，相模女子大学紀要　47，1983，p247～252
本多英明，　悲しみの訪れ ── C.S.ルイス「魔術師のおい」をめぐって，相模女子大学紀要 49，1985，p133～
中尾セツ子，　C.S.ルイスの「ナルニア国物語」── アスランによる変容，清泉女子大

学紀要 33，1985.12，p80〜95
竹田伸一，　ハリー・ポッター小辞典，金城学院大学キリスト教文化研究所紀要 6，2001，p15〜54
竹田伸一，　ハリー・ポッターとJ.K.ローリング，金城学院大学論集 198，2002，p51〜73
竹田伸一，　ハリー・ポッターの世界とキリスト教，金城学院大学論集 193，2001，p49〜110
棚瀬江里哉，　人文科学 C.S.ルイスとJ.R.R.トールキン ── 信仰と作品，北星学園女子短期大学紀要　38，2002，p81〜87
小野兼子，　Aslanに見るイエス像──C.S.Lewis のナルニア物語，英文学誌 25 法政大学英文学会，1983.3，p69〜82
斎藤康代，　ファンタジーの世界と子どもたち ── C.S.ルイスの描いた子どもをめぐって，東京女子大学附属比較文化研究所紀要 49，1988，p103〜122
高鷲志子，　Sub-creationとしての『指輪物語』，経営情報学部論集 第８巻第２号 1995.12，p339〜346
広瀬久允，「ハリー・ポッター」考，　キリスト教と文化 16，2000，p5〜26
広瀬久允，「ハリー・ポッター」考(2)，　キリスト教と文化 19，2003，p101〜120
関裕三郎，　英国創生神話としての『指輪物語』(1)，明治学院論叢 579，1996.3，p1〜28
伊達安子，　トールキン作品の神話的構造について　その１，国立音楽大学研究紀要 13，1978，p115〜132
DominicCheetham，　展望 ハリー・ポッター現象，ソフィア 49(1)，2000.5，p96〜110